

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 14 日現在

機関番号：34428

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07359

研究課題名（和文）英語コーパスを用いた法副詞の機能分析と類義性の解明

研究課題名（英文）A Corpus-based Approach to the Functions of the English Synonymous Adverbs

研究代表者

鈴木 大介（Suzuki, Daisuke）

摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：90635393

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、conceivably, maybe, perhapsといった、英語における可能性（蓋然性）の低い法副詞を対象に、実際に用いられた言語文脈に着目し、それらの差異を具体的に示しながら、各副詞の用法や機能を詳細に分析している。

従来、同じ意味を表すものとして考えられていたものが文法性や主観性の観点から区別が可能なだけでなく、実は全く異なる志向性を持つという点を実証した。同時に、従来の話し手の認識性を表す（一方向的な）働きを越えて、話し手と聞き手のやり取りに関わるような（双方向的な）用法も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examines the use and distribution of the synonymous adverbs conceivably, maybe, and perhaps in order to determine their functional similarities and differences. The results demonstrate that these adverbs, which at first sight appear to be nearly interchangeable, actually function in various ways. In addition, I suggest that although epistemic modality can underlie these adverbs in essence, some of them can also be used in an intersubjective context.

研究分野：英語学

キーワード：副詞 類義語 機能 英語史 語用論化（間）主観化

### 1. 研究開始当初の背景

英語における類義語間の分析については、従来、伝統的な語彙意味論領域において内容的意味の考察が行われ (Lyons 1977; Cruse 1986; Geeraerts 2010)、分析が意味論レベルにとどまっており、方法論の難しさもあいまって語用論レベルでの考察が不足している状況にある。特に談話、発話行為、文法化や(間)主観化といった一般性が高い観点からの記述や説明の可能性を多分に残しており、様々な見地から考察を行うことが求められている。

実際、法副詞の研究においては、法副詞が主観的な意味を表すのか、それとも客観的な意味を表すのかという点について統一した見解が未だに出されておらず、語彙レベルに至っては各研究者によって表現の扱いが様々であるという現状にある (Halliday 1970; Lyons 1977; Perkins 1983; Watts 1984; Tancredi 2007; Ernst 2009)。

### 2. 研究の目的

本研究では、英語の法副詞を分析対象とし、類義語間の意味・機能の差異を明らかにする。コーパスという大規模な言語資料を調査に用いて、複眼的視座から、徹底した記述に基づいた実証的な研究を進める。さらに、これらの分析によって類義語の体系についての理論的な考察を深化させる。具体的には、以下の二点に集約される。

- (1) 実際に使用されている言葉の機能や用法に着目し、どのような使用域・文脈、あるいは、どのような意味・統語環境で、どのような形式が用いられるのか、という視点から言語を詳細に分析する。この研究は、英語の豊富な同義語・類義語の集合をそれぞれ明らかにして、その中の差異を示すような語法的な研究にとどまらず、それらを連続的・統一的に捉えることで、機能・用法という観点から、英語学における「意味」研究への貢献を目指す。
- (2) 次に現代英語における言語変化に重点を置く。なぜなら、現代英語においても言葉は徐々に変化しており、史的变化という観点を導入することで、英語の動的な側面を捉えることができるからである。具体的には、CLMET や PPCMBE、CMSW 等、後期近代英語のコーパスを用いて用例の収集・観察を行う。頻度の低い現象については膨大な量を備える OED の引用文データを利用することができ、幅広い時代を見ることも可能となる。その際、現代英語における言語現象との関わりを考察し、共時における法副詞の多義性の説明を試みる。法副詞がどのように機能的な発達を遂げたのかを調べることによって、形式と機能との関係性についての手がかり

が得られるからである。

### 3. 研究の方法

- (1) どのような法副詞に、どのような要因が強い影響を及ぼしているのかを考察するために、様々なアプローチから広く現象を見る。節の中での分析にとどまらず、節を超えた観点にも着目し、複眼的視座からの法副詞の機能分析を試みる。より広いコンテキストから法副詞を捉えることで、より具体的な法副詞の機能を見ることが出来る。
- (2) 次に、共時的な分析を行った現象に対して通時的な分析へとその調査範囲を拡大し、新たな知見を取り入れる。さらに、普遍的な要因を調査するため、他の副詞や肯定・否定に関わる類義表現間の分析へと研究を展開させる。その中で、どのような要因が各表現に影響を及ぼしているのかを要因間の相互作用も示しながら、モデル化して視覚的に明示する。統計的手法を用いることで、各要因の影響の度合いを数値化し、全体像を把握することができる。
- (3) 分析対象としては、実際の話し言葉や書き言葉として使用された言語資料、とりわけ大規模に電子化された資料としてのコーパスを用いる。その中で用いられている該当表現を用例として全て抽出し、大量の例に基づいた分析を進めていく。
- (4) コーパスに収集されている言語というのは、実際のテキストの一部であり、独立した単文(節)の集合ではなく、その該当表現を含む全体がまとまりのある体系をなしている。この特徴に注目すると、単文を超えたより広い文脈に基づく要因を扱うことが可能となる。このようなコーパスの特性を利用し、より大規模なコーパスから収集したデータに基づいて、従来から軽視されがちであった文脈に依存した機能や文脈の中から生じる機能に着目し、表現との関係性を詳細に論じていく。

### 4. 研究成果

2の(1)については、まず *maybe* と *perhaps* のペアを扱い、結果として *perhaps* は場面を問わず一般的に広く用いられている一方で、*maybe* は話し手の主観性と密接な関わりがある、という点を明らかにした。次に、*conceivably* と *perhaps* の差異を分析し、*conceivably* がモダリティの表出(モーダル機能)と深く関わっている一方で、*perhaps* は談話におけるトピックの表示(談話機能)と強い繋がりがある点をコーパス調査とアンケート調査の両面から実証した。従来、同じ意味として考えられていたものが実は全

く異なる志向性を持つというのである。

2の(2)については、最初に *maybe* の歴史的な発達に焦点を絞り、現代英語における機能の拡大についての手掛かりを探った。表現形式(の頻度)や意味の推移を中心に現代に至る発達を分析したが、これには主観化という意味変化のプロセスが関わっており、現代においてもその発達が継続中であることが明らかとなった。次に、*perhaps*, *peradventure*, *percase*, *perchance* といった(似通った形式を有する) *perhaps* のグループに着目し、これらが現代に至るまで、いかにして拡散、あるいは収束してきたのかを実証的に示した。その際、どのような過程を経て現代における副詞の多義性に繋がったのか、という点に対しては、文法化や(間)主観化といった一般性の高い観点から説明を行った。

以上の通時的・共時的研究の成果は、それぞれ論文にまとめ、この分野の権威である *Language* や *Lingua*, *Functions of Language* といった国際誌や学術雑誌にそれぞれ論文が採択され、公刊された。( *Functions of Language* の論考は刊行予定である。)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Suzuki, Daisuke. "Variation between the Modal Adverbs in British English: The Cases of *Maybe* and *Perhaps*", *Functions of Language* 25. 2018. (印刷中)(査読有り)

Suzuki, Daisuke. "The semantics and pragmatics of modal adverbs: Grammaticalization and (inter)subjectification", *Lingua* 205: 40-53. 2018. (査読有り)

Suzuki, Daisuke and Takashi Fujiwara. "The Multifunctionality of 'Possible' Modal Adverbs: A Comparative Look", *Language* 93 (4): 827-841. 2017. (査読有り)

Suzuki, Daisuke and Takashi Fujiwara. "Modal Adverbs and Discourse Context: The Case of *Doubtless*, *No Doubt*, and *Undoubtedly*", in Juana I. Marín-Arrese, Julia Lavid-López, Marta Carretero, Elena Domínguez Romero, M<sup>a</sup> Victoria Martín de la Rosa and María Pérez Blanco (eds.) *Evidentiality and Modality in European Languages: Discourse-Pragmatic Perspectives*, pp. 401-419. Bern: Peter

Lang. 2017. (査読有り)

Fujiwara, Takashi, Fuminori Nakamura and Daisuke Suzuki. "The form-function relation in *of*-phrases: An experimental approach", In Linda Escobar, Vicenç Torrens, and Teresa Parodi (eds.), *Language Processing and Disorders*, pp. 92-102. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing. 2017. (査読有り)

Suzuki, Daisuke. "Maybe: Development and Topic Marking", *Token* 5: 93-107. 2016. (査読有り)

[学会発表](計2件)

鈴木 大介・藤原 崇、「英語法副詞における機能の拡大 主語名詞と述語動詞との関連から」、日本語用論学会第20回大会、京都工芸繊維大学、2017年12月17日。

Suzuki, Daisuke. "Modal adverbs and their parenthetical use", 2017 Conference of the Linguistic Society of New Zealand, University of Auckland, New Zealand, November 23-24, 2017.

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 大介 (Daisuke Suzuki)  
摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：90635393

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
( )